◀ 巻頭言 ▶

「失敗を語り継ぐということ」

理 事 内 野 昌 幸

今般の技術の進歩は目覚ましく、船舶の機関設備は年々高度化しています。新燃料の導入及びそれに伴う機関の複雑化、デジタル技術の活用、自動化への取組みなど、私たち機関士を取り巻く環境は、これまでにない速度で変化しています。

しかし、どれほど技術が進歩しても変わらないものがあります。それは、安全運航が過去の経験と教訓の積み重ねによって支えられているという事実です。

当誌に掲載される故障事例の多くは、それを経験したエンジニアにとって決して誇れる出来事ではないかもしれません。それでも多くの方々が貴重な時間を割いて寄稿いただいているのは、同じ事象を他船で繰り返さないためです。一隻の船で得られた教訓を業界全体で共有する。その積み重ねこそが、長年にわたり海運の安全を支えてきたのではないでしょうか。

振り返れば、今日では常識となっている多くの安全や保守管理の手法も、過去の失敗や事故の経験から生まれたものです。原因を究明し、再発防止策を講じ、それを実行、共有する。その積み重ねによって今日の安全運航が築かれてきました。

一方で、昨今は失敗について語ることが難しい時代になったとも感じます。失敗そのものよりも、誰が行ったのかに注目が集まることもあります。しかし、本来重要なのは責任を追及することではなく、同じ事象を繰り返さないことにあるはずです。

機関室で発生するトラブルの多くは、決して特別な環境だけで起こるものではありません。日常の点検や整備、運転管理の中に潜む小さな兆候を見逃した結果として発生する場合もあります。だからこそ、他船で起きた事例を自分自身の経験として捉え、「もし自船で起こったらどうするか」を考える姿勢が重要です。

現在は機関設備や燃料の多様化が進み、従来にはなかった知識や対応能力が求められる時代になりつつあります。そのような時代だからこそ、成功事例だけでなく、失敗や試行錯誤の過程を業界全体の財産として共有していく意義は、これまで以上に大きくなっているように思います。

失敗は誰にでも起こり得ます。しかし、その経験を共有し、教訓として残すことができれば、その失敗は単なる失敗ではなくなります。一人の経験、一隻の教訓が、多くの機関士の学びとなり、業界全体の安全向上につながるからです。

技術は設備やシステムだけによって発展するものではなく、そこには必ず人の経験と知恵があり、その中には成功だけでなく、失敗から得られた教訓も含まれています。

私たちが先人たちから受け継いできた多くの知識と経験も、数え切れない試行錯誤や失敗から得られた教訓の上に成り立っています。

一つの失敗を、一人だけの経験で終わらせない。

その思いを共有しながら教訓を受け継ぎ、未来へつないでいくことこそが、安全で信頼される海運を支える礎であると信じています。